川口清史教授退任記念号によせて

立命館大学政策科学部長　重　森　臣　広

『政策科学』の本号が川口清史先生の退任記念号として発刊される運びとなったことを、たいへんうれしく思っております。本号発刊の企画、編集等にご尽力いただいた立命館大学政策科学会編集委員の先生方、また、本号にご寄稿いただいたすべての方々に厚く御礼申し上げます。

川口清史先生は、1969 年に京都大学経済学部を卒業されたのち、同大学大学院経済学研究科へ進まれ、1976 年 4 月に立命館大学産業社会学部助教授に就任されました。1987 年に教授に昇任されたのち、立命館大学政策科学部の構想、設置、開学の際に中心的な役割を担われました。1995 年には、ご高著『非営利セクターと協同組合』（1994 年、日本経済評論社）により博士（経済学）を京都大学より授与されました。

2004 年に政策科学部長に就任されたあと、2007 年 1 月、立命館総長・立命館大学学長となり、2 期 8 年にわたりその重責を担われました。先生の立命館大学での教員歴は 40 年近くに及びます。この間は日本の大学、とりわけ私立大学が大きな曲がり角にさしかかり、数々の改革課題に直面した時期にあたります。そうした時期を経ながら、立命館大学も大いに発展し、京都、滋賀、大阪の 3 つのキャンパスに 14 学部 19 研究科をもつ大学となりました。総長・学長としてのご業績はもちろんのこと、教学・企画等の基幹部門で全学の要職を歴任された先生のご貢献の大きさに改めて驚かされます。

先生のご専門は経済学、とりわけ社会経済学であり、これをもとに非営利組織や協同組合の研究を重ねてこられました。20 世紀末から現在にいたる転換期において、政策のコンテンツとプロセスの双方において注目されるアクターの動態分析は、相対的に新しい分野である政策科学の発展を促す原動力となりました。そのご貢献はひとり学界にたいするものであるにとどまりません。政策科学部は、人間でいえばようやく成人式を終えたばかりの段階にあります。1994 年の開学以来、教育課程の点検、見直しを絶えず行なってきましたが、ある種の方向指示器の役割を果たされたのが先生であり、それは新時代の政策研究に邁進する先生の学問的業績あってのことであったことを改めて思い知らされます。実学的性格が強い政策科学ではありますが、先生が絶えず「知」と「学問」の新しい次元を探求するという哲学的な指向性をもっていたことも、この学部・研究科の多彩な学問分野の総合を促すことにもなりました。

ちょうど一年前になりますが、先生の最終講義を聴く機会をいただきました。8 年間にわた

り立命館大学のトップリーダーを担われたご経験が、先生の学問的探求と見事に接合されたお話であったことを記憶しています。日本のみならず、さまざまな歴史的発展の経緯をもつ世界の大学とそこにおいて探求されるべき「知」とは何か――ご講義はそうした問題提起で結ばれていたと私なりに解釈しております。

政策科学部の同僚一同、研究者として、教育者として、そして大学人として先生に育てられたと言っても過言ではありません。そうした先生のご恩に、今この時点で、どれだけ報いることができているのかと問うたとき、甚だ心もとない思いです。先生から引き継いだこの学部と研究科のいっそうの発展を期すことこそが、先生への報恩にほかなりません。同僚一同、この思いを新たに、長年にわたる先生のご学恩、ご貢献に改めて敬意を表し、感謝の意をここに表したいと思います。

2016 年 3 月